

テサロニケ人への手紙第二

テサロニケ人に最初の手紙を書いたからまだ間もないうちにパウロは手紙の中で触れた問題が解決するどころか悪化しているという報告を受けました。迫害は激しさを増しテサロニケのクリスチャンたちはイエスが再臨する日について混乱しうろたえていたのです。そこでパウロは3つのセクションからなるこの短い手紙を書きテサロニケ教会の3つの問題に言及しています。まず今も迫害が続いているさなかで希望を示し次に来るべき主の日について明らかにしています。それから最後に普通に働くことを拒み怠惰に暮らしている人々について警告をしています。そしてそれぞれのセクションは短い祈りをもって閉じられています。パウロは冒頭でテサロニケ人の信仰と愛が成長しまた彼らが忍耐強くあり続けていることを感謝し祈りをささげています。ギリシャ人やローマ人だけでなくユダヤ人までもが彼らに対する迫害を強めていることをパウロは知りました。信徒たちは暴力的な圧力にさらされている宗教的少数派だったので抑圧がさらにひどくなればイエスから離れてしまうのではないかとパウロは心配しました。そこで最初の手紙にも書いたように彼らがイエスのために苦しみを受けることは神の国に参加することだと思い出させようとしたのです。イエスは十字架の苦しみを通して王座につきました。イエスに従う者たちもイエスの非暴力と忍耐に倣うことによって世界に勝利をするのです。またその苦しみは永遠に続くものではないとパウロは書きました。イエスが再臨すると彼らを抑圧し罪のない人の血を流した者たちの上に神の裁きが下されます。神の裁きとは主の御前からそしてその御力の栄光から退けられることです。パウロはここでイエスを拒絶した者の運命について詳しく述べることはしません。ただ生涯を通してイエスと関わりを持ちながらなかった者たちは終わりの時にその望みどおり創造主であり王である方から遠ざけられるのだと言うのにとどめています。パウロにとってはそれこそが最大の悲劇でした。命と愛の源であるイエスから離れることを選ぶのは自ら滅びを招くことです。パウロはこのセクションを神が苦しみをも用いて彼らの人格を成長させそれによってイエスの名があがめられるようにという祈りで閉じています。パウロが次に書いているのはイエスの再臨と主の日のことについてです。テサロニケ教会にはパウロの名を騙かたって人類の悪に対する神の裁きつまり主の日はすでに来たという

偽りの情報を流している者がいました
彼らは世の終わりについて特定の日を予言し
クリスチャンたちを怯えさせていたようです
それというのも激しい迫害の下にあったテサロニケ人たちは
イエスの再臨は夜中の泥棒のようにこっそりともう来たのだという
言葉に動揺しやすかったのです
彼らは神に捨てられて苦しみの中に置いてけぼりにされたのかと思いました
このように自分の教えを歪曲した嘘にパウロは憤っていました
イエスの再臨とは恐れではなく希望と信頼をもたらすものなのです
パウロは自分がテサロニケにいた時に教えた
イエスの再臨についてのすべてを思い出させるために
もう一度ここでそれを要約しています
あまりにも短い要約なのでその解釈にはたくさんの謎が残りますが
確かなのは彼がイザヤ書とダニエル書の有名な言葉を引用して
この世の王国はネブカドネツアルや北の国の王のような
神に反逆する支配者を生み出し続けると述べていることです
彼らは自分自身を神のように見なしていました
パウロはこれらの古代の王たちと彼らについての預言の特徴は
パウロの時代のローマ皇帝カリグラとネロにも当てはまり
これからも同じことが繰り返されるだろうと考えていました
人類の歴史は悪そのものから力を受けた神に反逆する者が
神の世界に大惨事と暴力を引き起こす恐ろしい時代を迎えますが
それはずっと続くことではありません
イエスが再臨すると反逆者と悪を行う者たちに立ち向かい
ご自分の民を救い出されるのです
ですからパウロはここで
終末について詮索する材料を提供している訳ではなくて
むしろテサロニケ人を慰めようとしているのです
パウロはマルコの福音書 13 章にあるイエスの教えを引用し
イエスの再臨の日は誰の目にも明らかな形で来るので
自分たちだけ気づいていないのでは置いて行かれているのではと
心配する必要はないと語ります
それよりもイエスが再臨して救い出してくださる時まで
イエスに忠実でいることが大事なので
パウロはイエスと父なる神に彼らを慰め強めてくださるよう祈ります
ここから最後の話題に移ります
怠惰な人たちへの注意ですが
この人たちは単に怠けているだけではありません
彼らは無責任で自分で働いて生計を立てることをやめ
乱れた生活を送っていました
パウロは第一テサロニケでもこの問題に触れているのですが
事態は悪化してしまったようです
彼らがなぜ働くことをやめたのかははっきりとした理由はわかりませんが
前のセクションの問題とつながっている可能性はあります
イエスがすぐに再臨されるなら働く意味はないと思い
普通の生活を放棄したのかもしれない
あるいはパウロはこれをローマの文化である

パトロン制度と結びつけている可能性があります
これは都市に住む貧しい人々が
裕福な人々に個人的にサービスを提供するクライアントになる制度です
彼らは不定期に与えられる経済援助によって暮らしていましたが
多くの見返りを求められていました
パトロンの不道德な生き方にも影響されてきましたし
その収入は不安定でした
乱れた生活をし働かずにおせっかいばかりしている人々とパウロが言ったのは
こういう人たちを指していた様です
自分が一緒にいた頃に見せたお手本を思い出すようにと
パウロは言っていますパウロはお金を要求しませんでした
額に汗して働いて生活費を稼ぎ
テサロニケ人からは謝礼を受け取らずに仕えたのです
イエスに従うものとして
イエスの自己犠牲的な愛に倣って一生懸命働き自活し
その生活が他の人々にとって益となるような生き方を
パウロは勧めています
そして最後にこのような混乱や苦しみの中にあっても
救い主であるイエスを通して
神が平安を与えてくださるようにと祈り手紙を閉じています
テサロニケ人へのこの短い手紙は
初代クリスチャンの再臨についての信仰と
最後の裁きへの期待について教えてくれます
それは決して終末がいつどのように起こるかを
予想するためのものではありませんでした
むしろそれは希望を抱き
イエスに忠実に自分を捧げるためのものでした
特に迫害されていたクリスチャンにとっては
また迫害があろうとなかろうと
人の生き方は何に希望を置くかによって変わるということを
後の時代のクリスチャンに教えてくれるのです
これがテサロニケ人への手紙第二です

【要約】

パウロの第二の手紙は、第一の手紙の後に迫害が激化し、テサロニケのクリスチャンたちがイエスの再臨に関して混乱しているという報告を受けて書かれました。手紙は三つのセクションから成り立ち、それぞれ異なる問題に焦点を当てています。

第一のセクションでは、パウロはテサロニケのクリスチャンたちが迫害に直面し、イエスの再臨がいつ起こるのかについて混乱している状況に希望をもたらします。彼は、苦難はイエスに従う者の宿命であり、最終的には神の裁きによって正されることを強調します。

第二のセクションでは、誤った情報や偽の教義に惑わされないようにと、再臨についての真実を再度説明します。彼は、イエスの再臨は明確で誰にも見逃されない出来事であると確信し、テサロニケ人たちに冷静さと信仰を持つよう促します。

最後のセクションでは、怠惰な人々について警告し、労働と自立を奨励します。パウロは自分が働いて生計を立て、他人に依存せずに労働する姿勢を示し、クリスチャンたちにも同じような姿勢を持つよう助言します。

手紙は、テサロニケ人たちにイエスの再臨に対する希望と信仰を強調し、現実的な生活の指針も提供しています。迫害や混乱に直面しながらも、クリスチャンたちは信仰と希望を失わず、イエスに従う生き方を実践するように勧められています。